

新国策 13 8/5/25

〔激論〕 日ソ関係は改善できるか

● 対 談

・砂時計の砂を棒で突つつく……A・ボーピン
 と、その砂は早く落ちない
 ・道路に立ちはだかる大きな石をどけないと、通れない……矢次 一夫
 (伊ズベスチャ紙 政治評論員 本会代表常任理事)

四月初め、ボーピン氏一行来日の連絡があったので、話し合いの場を設け一時間ばかり懇談した。以下はその概略である。

「鵜の嘴の食い違い」という。この対談も終始噛み合わなかったが、しかし、それなりに日ソ関係の現状を表わしていて、興味深い。なお、同席したのは、本間長世・東大教授、神谷不二・慶大教授、中嶋嶺雄・東大教授、銀治田進・銀治田商会社長、ソ連側からは、ゲラシモフⅡノースチ通信政治評論員、エフィーモフⅡ同通信東京支局長、クズネツォフⅡ前駐日大使館参事官の七氏。通訳はノースチ通信の徳永晴美氏。

(4・23 都内のホテルで)

矢次 日本にとって、対ソ関係を良好に維持することはむしろ大事なことで、これは論を俟たない。ところがここに、一つの障害がある。北方領土問題ですよ。あたかも、道路のどまん中に巨大な石がどっかり居すわっているようなもので、これに始末をつけなければ二進も三進もいかない。ボーピン その問題は、こんなおいしいご馳走を前にして、われわれの食欲をさまたげるほどのものではないでしょう。

これは複雑な問題であり、何しろさまざまな観点、視点があります。みなさま方には、すでにわれわれの政府の公式的な立場はおわかりのことと思います。われわれジャーナリストは政策を作るのではなくて、コメントする側ですので……

矢次 それはたびたびうかがっている。「プラ

ウダ」でも「イズベスチャ」でも「ノースチ」でも。しかし、それは日本側が得心していないことを理解してほしい。ここで領土問題の外交交渉をやるわけでもないし、また一時間程度で話し合えることも思っていない。しかし、前々からの経緯を考えると、突然お国が、領土問題はもう存在しないというふうにい出すというのはいい、どういうことですか。前はそうではなかったはずだ。

ボーピン わが国外務省は、日米安保条約に關連して、一九六〇年にすでに明確に声明を出している。われわれは、日本という国を孤立した国であるというふうには見ていません。つまり、日本はアメリカの戦略的な一部をなしている国であると理解しています。日米間の軍事面での緊密な結び付きを、われわれは考慮せずにはいられませんが、しかも、この緊密度はだんだん強まる傾向にあります。

しかし、現時点ではそれが原則的に重要な問題ではありません。第二次大戦は、一連の国境の変更をヨーロッパあるいはアジアにおいてもたらした。こうして決まった国境がまた今後、変化させられてはならないというのが、われわれの立場です。そのためにわれわれは三〇年間、ヨーロッパで戦ってきました。ですから、もしアジアで、それ以外の原則が確立することになると、ヨーロッパにおける原則と矛盾することになるわけです。

したがって、「北方領土」は歴史的な問題でもなく、また地理上の問題でもなく、これはまさに政治問題です。ましてや、この問題をソ日関係の今後の発展の前提ととらえるならば、われわれは迷路に陥ります。

しかも、この袋小路たるや、日本の利益にも、またソ連の利益にも決してかなうものではありません。これは日本人自身によって解決されなければなりません、われわれとしては、この問題を脇にどけておいて、可能性のあるところから、その可能性を発展させる方向を提案します。現状では、これが唯一のリアリスティックな方途であると感じます。

いずれにしても、領土問題だけを議論するのは適当ではないと思うのです。それだけが残っているというふうな断定的にいわれると、田中訪ソの時にプレジネフはウソをついたことになりすね。戦後未解決の諸問題について、今後話し合うということの合意は明らかにしているわけですから：

矢次 皆さんは、もはや領土問題は存在しないという立場をとってくださるわけだが、こちらは、そうはいかないという立場なのです。



ボーピン 私が覚えている限りでは、当時の田中リブレジネフ・コミニケには、「第二次大戦の時期より、残っている未解決の諸問題」というふうにはうたわれていますが、しかし、「領土問題を含む」ということはどうでしょうか。

私の意見では、いま日本の方々が考えているような形でこの問題が解決されるであろうと考えることは、決してリアリスティックではない。もし、この問題が存在すると想定した時にさえも、これについて雑音が多くなればなるほど、そして圧力が大きくなればなるほど、その度合いにしたがって、双方が受け入れ得るような形で問題解決がより困難あるいは不可能になってくるのではないのでしょうか。こういうたとえはどうでしょうか。


ここに底に小さな穴があいているガラスのシリンダーがあるとします。中には砂が入っている。ここから早く砂が落ちて欲しいと感じているみなさんは、それ急げ、というわけで、一生懸命に棒で砂を突つつく。しかし、決してその砂は早く落ちませんね。だけど、やさしくコップを持ち上げてゆすってやると、もしかすると、砂はより早く落ちるかも知れません。

これは象徴的に申したのですが、われわれは棒で突つつかれるような外圧を望みません。政治問

題とみなされるかっこ付きの領土問題は、われわれの側からは現在、存在しない。われわれは、第二次大戦後の国境を見直すような立場はとりません。

しかし、私がここで少し豊かな想像を働かせて、次のような状況を描いてみたとしてみましょう。これがいつのことになるか知りませんが、たとえば、緊張緩和のプロセスがより深まる、軍備のレベルを著しく低下させるための工作が実行される、それから、北東アジアにおける状況が改善され、平常化される、たとえば、日本との素晴らしい関係を維持しながらも、アメリカが日本から出ていく——そういうことになれば、基本的に新しい状況がもし出されます。そういう状況の下では、この問題に新しいアプローチも考えられるでしょう。

しかしわれわれは、みなさんも同じですが、残念ながら、二世紀の考え方方で問題に対処するところまではいっておらず、ただいま今日の二世紀の状況でものを考えなければいけない。つまり、きょうの日付でいえば、日本のみなさんが想像しているような方向での問題解決は全く現実性を持っていないということがいえます。



Tokyo gas

★東京瓦斯株式会社

〒103 東京都中央区八重洲1の2の16 電話 (273) 0111 (大代表)